

手術を 終えて

～退院のご報告～

天見谷行人

退院ご報告

退院のご報告

皆様、お久しぶりでございます。

2016年12月8日、無事、4回目の右耳の手術が終わりました。

僕の病気は「[コレステリン肉芽種](#)」という極めて珍しい病気です。

特効薬がありません。治療方法や、手術で完治する、という保証がない病気です。今回は主治医のドクターと数年にわたる診察と打ち合わせの結果、手術に踏み切りました。

今回も全身麻酔でした。

既に退院しまして、自宅療養しております。

近くのコンビニまでは、何とか歩ける程度に回復してまいりました。

クリスマスには皆さまから温かいお言葉をいただきました。

この場をお借りして御礼申し上げます。



ペットショップの猫

12月26日、退院後2回目の、外来検診。

担当ドクターに診てもらったところ、術後は良好。

耳の中の皮膚が貼ってくれるまで2ヶ月ぐらいかかるそうです。

その間はちょっとジメツとしますので、耳に綿球でフタをします。

まあ、2、3ヶ月なんて、あっという間ですからね。

施術した右の耳は、だいぶ聞こえるようになってきました。嬉しい事ですね。

帰りに病院の近くのペットショップに立ち寄りしました。



この猫ちゃん、どうやら左利きのようです。

おまけの[ねこ動画](#)です。

僕の病気人生を書き残す

今回の手術は、全身麻酔での4回目の手術となります。

実を申しますと、僕は以前、痔瘻の手術を受けております。そのときは下半身麻酔でした。結局、いままでの人生で、5回、手術台の上に横たわったこととなります。

また、過去には高校二年生の時、肺結核を患い、8ヶ月間、人里離れた結核専門の療養所で入院生活を送りました。

そのため、僕は退院後、高校二年生をもう一度、やり直しております。

いままで僕は、世に言われる「闘病記」の類いに対して、あまり好意的ではありませんでした。自分を悲劇のヒロインに仕立て上げている自伝記のようなものが、あまりに多かったからです。

8ヶ月間の入院療養と、5回の手術を「一回の人生」で受ける、という僕の個人的な経験。

こういう体験をしている人は結構少ないのではないかとおもいます。

そこで、この際思い切って、自分の今までの病歴をメインとした

「病気・入院・手術の自分史」を文章に残しておくのも悪くないな、とおもいました。

純粋に、いわゆる「ベタな闘病記」で構わない、と開き直ったのです。

ただ、普通の闘病記と違うのは

「一度の人生で体験した、“病気”と“手術”の回数が人より多い」という実に単純なことです。

しかし、それだけいろんな病気を体験しているので、

「守備範囲が広い」

ということも言えます。

また、これから入院・手術を控えている、という方へ、

僕の体験記を読んでいただくことで、事前に心構えができて

「ああ、入院、手術って、そんな風にやるのかあ〜」

と、少しでも不安を和らげることができたらなあ〜、とおもうのです。

普段はどんなに強気で、虚勢を張っているような人でも、

「いざ手術」

「切られる」

ということになると、途端に心細くなるものです。

なにしろ、手術台の上では、まさに

「まな板の上の鯉」

患者は何にもできません。

できれば手術台から逃げ出したい、そんな思いにとらわれます。

イライラしたり、不安になったり、極端に神経質になったり、家族に当り散らしたりするでしょう。

また、「なんで自分がこんな目に合わねばならないのか？」

とひどく落ち込む時もあるでしょう。

私もそうでした。

だから、少しでも心の安寧になること「文章で癒すこと」を試みてみたい、という意欲が湧いてきたのです。

ところで皆さん、ヴィクトール・フランクルという人物をご存知でしょうか？

あのアウシュヴィッツ、死の収容所から生還した、ユダヤ人精神学者です。

収容所での体験を描いた[「夜と霧」](#)という著書で世界的に有名です。

彼の言葉に

「人生に対して意味を問うてはなりません、逆に人生はあなたに問いかけているのです。自分は
どう生きるべきか？ ということを」

今までの自分の人生を振り返り、自分の「運命」の「過半数」をみてきた時、どうやら、病気や手術、といった体験を書き残すことを、僕の人生は僕自身に課しているように感じられたのです。

新年ご挨拶～音楽についての雑感～

皆様、明けましておめでとうございます。

昨年末、手術を受けた右耳は、順調に回復しております。

だいぶ聴こえるようになってきました。

年末年始はテレビの音楽番組が楽しみです。

「ウィーンフィル・ニューイヤーコンサート」をはじめとして

クラシックファンには、楽しい番組、行事があります。

僕は今年2017年の4月に、57歳を迎えます。

四捨五入すれば、とうに還暦なのです。

「嗚呼……」とおもいますな。

精神年齢は、未だに二十代か三十代のやんちゃ盛り、といった具合です。

僕は中学二年生の頃からフォークギターを始めました。

未だに弾いております。



社会人になって、永くギターから遠ざかっていた時期がありました。

音楽を楽しむ、あるいは演奏する、ということは、それなりに「パッション」「情熱」なにより「意欲」を必要とします。

その精神力を支える最低限の体力も必要です。

十代の頃は、まさに音楽漬け、ギター漬けの日々でした。

毎日弾き込んでゆく中で、弦の響きがいつもと違う、と感じられることも出てきました。

そして、いくら練習しても、自分の力量では、もうどうしようもない「越えられない壁」のようなものを感じていました。

これから先、ギターを続けるにあたり、一体自分はどのような練習をすればいいのか？

さらには、自分は音楽で何がやりたいのか？

そういった疑問、大きな「壁」が、まさに自分の真正面に立ちはだかっていることに気づいたのです。

これは、音楽をかじったことがある人なら、誰でも多かれ少なかれ直面する問題です。

僕はその後、数十年、ギターから遠ざかりました。

そして五十代に差し掛かった頃、再びギターを弾き始めました。

十代、二十代の頃は、やはり狭い範囲でしか、音楽というものを捉えられませんでした。

ただひたすら「音楽の高みを目指す」

友人たちとバンドを組んだ時には

「コンテストで優勝する」

「プロになって音楽で飯を食う」

ただ、がむしゃらに、そのみを目標にしていました。

でも、五十代に入り、人生の後半を迎え、音楽に対して、それだけではない、何かを最近感じるようになりました。

様々な人生経験を積んだ後、もう一度ギターという楽器、そして音楽に向き合った時、

「ああ、こういうやり方、楽しみ方もあったな」と気づかされたのです。

肩の力を抜いて、音楽と向き合う。

それは、ぶっちゃけて、言い換えると、

「歳を重ねないとわからない」

という部分が、やはり「明らかに存在する」ということです。

ギターの超絶テクニックを披露するギタリストは、それこそ「掃いて捨てるぐらい」多く存在します。

「上手いだけじゃない、他の何か、何物か？」を求めて、今年もまた、音楽や文章と向き合っていきたいと思います。

そんなふうにして新しい年、2017年を迎えました。

改めて、

新年あけましておめでとうございます。

皆様にとって今年が、実り豊かな、佳き年でありますように。

なにより、世の中が平和でありますように。

天見谷行人

手術を終えて～退院ご報告～

<http://p.booklog.jp/book/112336>

著者：天見谷行人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mussesow/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/112336>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト